

# 琉球大学学術リポジトリ

## 牛の子宮内膜炎とその対策

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡嘉敷, 綏宝, Tokashiki, Suiho メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20557">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20557</a>



# 牛の子宮内膜炎 と その対策

最近乳牛の飼育熱が高まりつつあることは食生活の改善の面から喜ばしい現象であります。ところでこれらの乳牛の殆んどは日本から妊娠牛として購入されていますので到着後間もなく分娩し、搾乳が始まり、現金が入りますので、すべり出しは極めて好調ですが、乳牛の搾乳期間は凡そ10ヶ月ですので分娩後3ヶ月経過すれば種付けねばなりません。この種付けがうまくいくかどうかによって酪農経営が左右されるのですから問題は大きいのです。牛は普通分娩後60日頃に最初の発情があります。他の動物では妊娠すると泌乳量が急激に減少しますが、乳牛ではそのようなことはありません。ですから分娩後70-90日に種付けして妊娠させることは経営上からも有利だといわれています。

牛の繁殖を行うにあたって農家が一番心配するのは繁殖障害です。繁殖障害の中には無発情や卵巣腫等色々ありますが、子宮内膜炎も主要な疾患の一つです。ここでは子宮内膜炎について述べてみましょう。

## 原因

子宮内膜炎の原因としては：

① 伝染性細菌であるブルセラ、トリコモナス、ピブリオ等があります。沖縄でも一時東風平村や玉城村にトリコモナスが発生したことがあります。現在は伝染性の疾患はないようです。ただ注意すべきは1頭の雄が多

数の雌に種付けしたにもかかわらず妊娠しなかつた場合はこれらの伝染性疾患を疑い調査することです。

② 現在各地に発生している子宮内膜炎は主として非伝染性細菌、即ち連鎖球菌、ブドウ球菌、大腸菌、化膿桿菌等によって起るものと思われま

③ その外に細菌以外（ホルモン異常等）でも内膜炎が起るようですが、その本態は未だよくわかっていません。

ところで非伝染性の細菌は腔内にも帯在していますので、難産とか後産停滞の場合に非衛生的な処置をすると子宮内に侵入して内膜炎になります。また人工授精の場合細菌に汚染された精液の注入や注入器具の消毒の不完全によっても発生するものです。乳牛でも分娩後30日以前に発情する場合がありますが、この頃は子宮内に少数の細菌が残存している場合があって、この時期に人工授精をすると子宮内に侵入した精液と子宮内に残存していた細菌によって人工的な子宮内膜炎の発生を見、交配後に汚染した粘液が排出される場合があるようです。

さらに最近の研究によると卵巣ホルモンと内膜炎の発生とも密接な関係があつて卵胞ホルモンは細菌の発育を抑制するが、黄体ホルモンは増殖させるといわれています。人工授精の実施にあたって西川博士は、牛では黄体ホルモンの生産されている排卵の前後に精液を生殖器内に注入することは子宮内膜炎を起す危険性が多分にあり、反対に発情期ではこの心配はよほど減殺されるから

あまり遅くならない内に精液を注入した方がよいと述べています。

## 症 状

内膜炎にも色々ありますが、最も多いのは化膿性内膜炎です。これを2つに分け、その1は子宮から膿を排出する膿漏性内膜炎と他の1は子宮頸管が閉ざされて子宮内に膿のたまる子宮蓄膿症です。その中多いのは膿漏性の方です。蓄膿症は直腸検査をしないとわかりませんが、膿漏性内膜炎は外部や尾に黄白色の膿片が附着しますのでよくわかります。

それから潜在性子宮内膜炎というものがあります。この方は発情時以外は膿様物を排出しませんので非常にわかりにくいものです。再三種付をしても受胎しないのが特徴です。発情時に子宮頸管粘液をビーカに取って調べてみますと透明な粘液の中に黄白色の膿片が混在していますので容易に発見することが出来ます。また膿片を確かめる方法としてスライドグラスに塗抹、乾燥した後メタノールで固定、ギムザ染色して鏡検すると多数の膿球（白血球の死にから）が検出されます。

内膜炎の場合は発情周期は定期的に発現しますが、卵巣疾患と併発する場合は発情が無くなる場合があります

## 治療対策

先ず何よりも早期発見が大切です。そのためには常に牛に接して観察することです。外陰部から膿様物の漏出を認めた場合は内膜炎とみて間違いありませんから速かに獣医師に連絡して処置をしてもらうことです。

内膜炎の治療は生理的食塩水による子宮洗滌を行った後、抗生物質を子宮内に注入することによって、さほど重症でない限り1-2回の処置によって治ります。

またその予防策としては難産や後産停滞の場合の衛生的な処置、人工授精の無菌的な操作も是非必要です。それと共に牛を常に健康に保つよう合理的な飼育管理を行って身体の機能を旺盛にすることが大切だと思います。

(渡嘉敷 すい宝)